



Title	日本語の「のだった」とスペイン語のfue que/era que の対照研究
Author(s)	マジョール ロドリゲス, ホルヘ ダニエル
Citation	日本語・日本文化研究. 2023, 33, p. 69-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95376
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語の「のだった」とスペイン語の *fue que/era que* の対照研究

マジョール ロドリゲス ホルヘ ダニエル

1. はじめに

日本語の「のだ」とスペイン語の *es que* は、形式のみならず、意味機能の点でも、事情説明、事情説明の要求、驚き、非難、憤慨など、様々な類似性を示し、詳しい対照研究もある(福畠 1994、和佐 2005、マジョール 2021)

(1) a. ～のだ (名詞化の機能を持つ準体助詞のノ＋断定の助動詞ダ)

b. *Es que...* (繫辞動詞 *ser* の 3 人称単数現在形 *es* + 名詞節を導く接続詞 *que*)

しかし、その“過去形”である「のだった」と *fue que/era que* を対照させた研究は管見の限らない(*fue* は *ser* の点過去形で、*era* は線過去形である)。そもそも、スペイン語の *fue que/era que* の研究自体がほとんどないと言ってよい。福畠(1994)では *Era que* les parecía mal (彼らには良いとは思えないのだった) という例文を挙げ、*es que* は直説法現在形以外でも用いられると指摘しているのみである。

(2) a. 彼は、机の引き出しから、航空使用の便箋と封筒を出し、それを持って事務所を出た。

デダニに手紙を書きたくなったのだった。(野田 1997 より)

b. Él sacó del cajón del escritorio un papel de carta para correo aeropostal y un sobre y salió de la oficina llevándoselos. *Fue que* le dieron ganas de escribir una carta a Dedani.

(2)a において、「のだった」は「既に述べられたことに対する詠嘆的な調子の説明」を表す(田中 1971)。当該の意味を表す「のだった」は、(2)b が示すように、スペイン語の *fue que* (や福畠(1994)が挙げた *era que*) で翻訳することができる。(本稿で挙げた例文については、引用元が明記されていないものは筆者(コロンビア出身)の作例や翻訳である。)つまり、*es que* の過去形である *fue que/era que* にも「のだった」と類似した意味機能があることがわかる。意味機能において *fue que* と *era que* に違いはないが、形式的な面で使い分けがある。これについては後述する。

一方、(3)a では、「のだった」は「後悔」の意味を表している(野田 1997、田野村 2002)。しかし、(3)b のスペイン語は、その意味で使うには不適切である。(文頭の#は、当該文は文法的には適切であるが、意図する文脈や意味機能では使用されないことを表す。)

(3) a. あの時そう言うておくのだった。 (田野村 2002 より)

b. #*Fue que/Era que* lo dije/decía en ese momento.

つまり、そのような意味機能が *fue que/ era que* にはないことを示唆している。このように、「のだった」が示す意味機能がスペイン語の *fue que/era que* によって表現できない場合がある。そこで、本稿では、「のだった」と *fue que/era que* が意味機能の点でどのように対応するかを考察する。

2. 先行研究と本稿の目的

本稿の目的を述べる前に、日本語の「のだった」に関する先行研究を概観しておく。

2.1. 日本語の「のだった」に関する先行研究

日本語の「のだった」を扱った先行研究はいくつか存在し、その中で主要な先行研究である三上(1953、1963)、寺村(1971)、野田(1997)、田野村(2002)、安田(2014)は、「のだった」の意味機能をそれぞれ以下のように述べている。

三上(1953)は、「のだ」と「のだった」を時制の一種と捉えている。時制という言い方は便宜的なものであり、「のだ」の機能は「テンスばかりでなく、ムード的なもの、アスペクト的なものにわたっている」と述べて、「何々スル、シタ」の単純時に対し「何々スル、シタ＋ノデアル、アッタ」を反省時と呼んで対比させている。三上(1953)によると、単純時(Ex. 「只今、ヘンリが到着しました。」)は報告であって、センテンスの一つ一つが独立して使われ、順々に言い続けられて体裁をなしていくが、反省時による解説(Ex. A: 「何だかザワザワしているようだね?」B: 「ヘンリが到着したんです。」)は文脈の解決を目指すものだから、何らかの場面を前提として使われるものである。つまり、前文と関係的に出てくるものであって、その続き具合は順でなくて「逆」であると指摘している。さらに、三上(1963)では「のだった」は、(4)のように「反省時として過去における現在」(および過去(大過去))を表すとしている。また、「のだった」は、この意味を表すと同時に、(5)のように「後悔(事実の反対)」を表すこともあると述べている。

(4) 彼に言わせると、俳句はもはや文学ではないのだった。 (三上 1963 より)

(5) もっと勇気を出して、祈るんだった。 (三上 1963 より)

寺村(1971)は、次の「のだった」は、「過去に聞いたり、考えたりしたこと、つまり過去にいったん認識していたことを忘れていて思い出した、ということを表すタの用法」とであると論じている。

(6) 今晚ノ会ハ何時ニ始マルンダッタ？

(寺村 1971 より)

野田(1997)は、「のだった」も「のだ」と同様に対事的ムード（話し手が命題の内容をどのように捉えているかを表すものと対人的ムード（聞き手に対する話し手の態度を表すもの。）に分けて考えることができると主張している。「のだった」は「のだ」のタ形であるが、「のだ」で表される話し手の心的態度が過去に存在したことを示すとは限らず、独自の用法ももっていると指摘している。野田(1997)が対事的ムードの「のだった」の独自の用法として挙げたのは「想起」と「後悔」である。(7)は「想起」の例であり、(8)は「後悔」の例である。

(7) あっ、第二土曜日は休みなんだった。

(野田 1997 より)

(8) こんなときに限って電車は揺れる。居眠りするのもわざとらしい。仕方ないから新聞を広げて読むのだが、活字がすんなり頭に入らない。こんなことなら立つんだった。

(野田 1997 より)

一方、対人的ムードの「のだった」は、「物語的過去」を表すと論じている。そして、「のだ」と同じ（過去における事態の）「関連付け」を表すのはこの用法の一つであると述べ、以下のような例を挙げている。

(9) 彼は、机の引き出しから、航空使用の便箋と封筒を出し、それを持って事務所を出た。デダニに手紙を書きたくなつたのだった。

(野田 1997 より)

田野村(2002)は、命題の過去性を表す場合の「のだった」は、ある事柄 α を受け、それが β ということであった、その背後の事情は β ということであったと述べるのに用いられるとしている。

(10) 療平は金子と顔を見合わせて、照れ臭そうに顔をかいた。プレゼントのことなど、きれいに忘れていたのだった。

(田野村 2002 より)

そして、「のだ」と比較してこう述べる。ある事柄の背後にはどのような事情があるか、問題の実情はどうかという問題意識のもとで、現在の話し手（書き手）の視点から、それはこうすることで「ある」と述べられる。このような場合には、過去の事柄が問題とされていても、「のだった」ではなく、「のだ」になる。

(11) 太郎は返答を躊躇した。太郎には相手の真意が理解できなかったのだ。

(田野村 2002 より)

これに対して、「のだった」の用いられる文脈においては、言わば、表現の視点は、話し手(書き手)自身の現在ではなく、話題にのぼっている事柄の起こっている過去の場面の中にある。そして、背後の事情、実情はこういうことで「あった」と述べられる。

(12) 太郎は返答を躊躇した。太郎には相手の真意が理解できない(理解できなかった) のだった。

(田野村 2002 より)

(12)のような「のだった」では、表現の視点が表現者の現在を離脱し、話題の状況の中に置かれているわけである。この結果、「のだった」においては、過去において自分が体験したり見聞きしたりしたことがらを書き手自身の情緒や思い入れを混えて回想しつつ述べているような表現効果や、過去の事態の展開をその場においた全知の傍観者の立場から描写しているかのような表現効果が生じる。

さらに、田野村(2002)は、「のだった」には、「想起」と「後悔」の用法もあり、これらは命題の過去性を表すものではなく特殊な用法であるとしている。(13)は「想起」の例 (14)は「後悔」の例である。

(13) あっ、そうそう、お隣に來た荷物を預かっていたんだった。

(田野村 2002 より)

(14) あの時そう言っておくんだった。

(田野村 2002 より)

安田(2014)によると、「想起」の「のだった」は疑問文に現れ、過去に話し手が認識していた事柄を改めて問う発話として用いられると述べている。

(15) 今日は誰か来るんでした？

(安田 2014 より)

このように、「のだった」にはさまざまな意味機能・用法があり、「のだ」には見られないものもある。

2.2. 「のだった」の特徴

2.1.で挙げた先行研究から、「のだった」の意味機能は以下のようにまとめられる

A 命題の過去性を表す

- A1 事情説明・関係付け（野田 1997・田野村 2002）
- A2 過去における現在または過去（大過去）（三上 1953、1963）

B 独自の用法

- B1 想起（寺村 1971、野田 1997、田野村 2002、安田 2014）
- B2 後悔（三上 1963、野田 1997、田野村 2002）

先行研究では、特に触れられていないが、「のだった」には、以下のように、今後の展開を述べながら、物語を締めくくる場面で用いられる用法がある。

(16) そして、その少年は 5 年後に大統領になるのだった。

これは、「のだった」の独自の用法の一つだと考えられる。

- B3 物語を締めくくる

2.2. 本稿の目的

本稿の冒頭で触れたように、「のだった」の機能を全て *fue que/era que* によって表すことができるわけではない。本稿では、「のだ」と *es que* の対応とは異なり、*fue que/era que* は、「のだった」に比べ、その意味機能が限定的で、「のだった」と対応する場合がかなり限られていることを明らかにするとともに、*fue que/era que* が持たない「のだった」の意味機能がスペイン語の他の動詞活用（具体的には直説法線過去形、過去完了形、過去未来形）によって表現できることを論じる。

3. 「のだった」と *fue que/era que* との対応関係

本章では、2.2 でまとめた「のだった」の意味機能に沿って、それらがスペイン語の *fue que/era que* によって表現できるか、つまり、*fue que/era que* が当該の意味機能を有するかどうかをまず考察する。さらに、*fue que/era que* によって表現できない場合、「のだった」の当該の機能を表す文法的手段がスペイン語にあるかどうか、そして、ある場合は、どのような手段を用いるかを考察する。

3.1. 命題の過去性を表す「のだった」

まずは、命題が過去に存在したことを示す「のだった」の機能 A1 と A2 について見ていこう。

3.1.1. 事情説明・関係付け

田野村(2002)は、「 β のだった」は、ある事柄 α を受け、それは β ということであった、その背後の事情は β ということであったと述べるのに用いられると述べている。野田(1997)も、「のだった」は、Pの事情として、Qを提示しているという関係づけの場合があり、「のだった」の用法の中で最も「のだ」＋「た」に近いと考えられると指摘している。

- (17) a. 午後五時半になり、貴野原征三は立ち上がって衣装箆笥からコートを出した。六時から、その企業パーティがあるんだった。(野田 1997 より)
- b. Se hicieron las 5 de la tarde y Kinohara Seizou se levantó y sacó un abrigo del baúl de ropa. Era que tenía una fiesta de la compañía.
- (18) a. 療平は金子と顔を見合わせて照れ臭そうに頭をかいた。プレゼントのことなど、きれいに忘れていたのだった。(田野村 2002 より)
- b. Ryouhei se vio cara a cara con Kaneko y se rascó la cabeza avergonzado. Era que había olvidado completamente lo del regalo.
- (19) a. 太郎は返答を躊躇した。太郎には相手の真意が理解できなかったのだった。(田野村 2002 より)
- b. Tarou dudó la respuesta. Fue que no pudo entender las verdaderas intenciones de su compañero.

(17)～(19)において、「のだった」は「過去における背後の事情・実情の説明」(田野村 2002)の用法をもつ。各例の b. で示したように、この「のだった」は *fue que/era que* によって訳すことができるため、当該のスペイン語の表現にも類似した意味機能があると考えられる。

ただし、スペイン語の *fue que* と *era que* とでは使用環境が異なる。両者の使い分けにおいて重要なのは、*que* 節内にある動詞の活用形である。スペイン語では、当該の動詞が(17)のように直説法線過去形または(18)のように直説法過去完了形 (*haber* の線過去形＋動詞の過去分詞；*haber* は、英語の *have* に相当) の場合は、*es que* を線過去形の *era que* にすることが可能で、一方、(19)のように当該の動詞が点過去形の場合は、点過去形の *fue que* にすることができる。このような形式面での違いはあるが、*fue que* と *era que* に意味機能の上で差はない。さらに言うと、過去形の *fue que/era que* と現在形の *es que* との間にも差がない。

- (20) a. Ayer el joven Carlos vino pero no le abrí la puerta. Es que me había quedado dormido
「昨日カルロスさんが来たのにドアを開けなかった。寝てしまっていたのだ。」

- b. Ayer el joven Carlos vino pero no le abrí la puerta. ***Era que*** me había quedado dormido
 「昨日カルロスさんが来たのにドアを開けなかった。寝てしまっていたのだ(った)。」

(20)a では、話し手が「ドアを開けなかった」理由・原因を *es que* を使って説明している。
 (20)b も *era que* で理由・原因を説明している。田野村(2002)は、「のだった」について、表現の視点が話し手（書き手）自身の現在ではなく、話題にのぼっている事柄の起こっている過去の場面に置かれることによって、ある種の表現効果が生じると述べている。これは、「のだった」が自ら「積極的に」に過去形になったからだと言えるだろう。一方、*fue que/era que* には *es que* と異なる表現効果は感じられない。そうすると、*fue que/era que* は、*que* 節内の動詞が過去の時制を表すとき、その活用形に連動して *es que* が「受動的に」その形式を変えているにすぎないと言えるのではないだろうか。ちなみに、同じ過去時制でも、*que* 節内の動詞が過去未来形の場合は、*fue que* とも *era que* とも共起できず、現在形や未来形などの場合と同様、*es que* のみが可能である。

以上のように、スペイン語の *fue que/era que* は、時制について制限はあるものの、「のだった」と同じように事情説明・関係付けの意味機能をもつ。

3.1.2.過去における現在または過去（大過去）

- (21) a. 彼に言わせると、俳句はもはや文学ではないのだった。 (田野村 2002 より)
 b. En su opinión, **#fue que/#era que** el haiku ya no fue/era literatura.
- (22) a. 慌てても、焦っても、マッチポイントは近づいてこなかった。取ったり取られたりしながら、たんたんと積み重ねるしかないのだった。営々と、近づいていくしかないのだった。 (田野村 2002 より)
 b. (略) **#fue que/#era que** no quedó/quedaba más remedio que acumular puntos indiferentemente. **#Fue que/#Era que** no quedó/quedaba más remedio que irse acercando asiduamente.
- (23) a. 彼はいつときも早く、その場から逃げていきたくった。二、三球のラリーのあと、彼はわざと転んだ。足首をねんざしたふりをして、あっさり棄権してしまったのだった。 (田野村 2002 より)
 b. (略) **#Fue que/#Era que** se torció/ se había torcido el tobillo y rápidamente se retiró.

(21)～(23)の a において、「のだった」は、記事等で過去の時点で何らかの話題に対する誰かの意見、過去において現場の状況はこのようであったと描写していることを示し、「のだった」は「反省時として過去における現在または過去（大過去）」を表す用法をもつ。しか

し、このような意味機能は、*fue que/era que* で表せない。(21)～(23) の b のようなスペイン語は文脈的に不自然になる。

前節で *fue que/era que* は *que* に続く節にある動詞の時制に連動して *es que* が過去形になっていると指摘した。これは、*fue que/era que* の意味機能、具体的には、「事情説明、関連付け」の用法を継承していることを示唆する。そして、まさに、(21)～(23) の b は何らかの理由・原因を説明しようとしている文になるため、当該の文脈では不自然になっているのである。つまり、*fue que/era que* と異なり、日本語の「のだった」は、時制の一種として過去における現在を表すために自らが「積極的に」過去形になっていると言えるだろう。

実は、スペイン語には、「のだった」の「過去における現在を表す」という意味機能に相当する動詞活用形がある。直説法線過去形がそれである。長谷川(2017)では、直説法線過去は「線過去は過去のある時点における状態・行為(過去における現在)」を示すと記述されている。(以下のスペイン語例は長谷川(2017)より引用)

(24) a. Cuando sonó el teléfono, yo estaba en la ducha

「電話がなったときシャワーを浴びていました。」

b. Isabel dijo que estaba cansada.

「イサベルは疲れていると言った。」

長谷川(2017)は、(24)b について、線過去形は「時制の一致に使われ主節の過去と同時を示す」と記している。このようなスペイン語の線過去形の用法は、時制の一種として過去における現在を表す「のだった」とまったく同じである。先の(21)b と(22)b から *era que* を削除し、直説法線過去(下線部)の動詞文のみを残した以下のスペイン語は、当該の文脈でもっとも適切な表現になる。

(21) c. En su opinión, el haiku ya no era literatura.

(22) c. Aún precipitándose o impacientándose, no se acercaba al match point. En un toma y quita de puntos no quedaba más remedio que acumular puntos indiferentemente. No quedaba más remedio que irse acercando asiduamente.

以上のように、スペイン語の *fue que/era que* は、「過去における現在」を表す用法を持たない。しかし、この用法の「のだった」は、スペイン語では、直説法線過去形によって表すことができる。

また、(23)b のような過去における過去(大過去)も、*fue que/era que* ではなく、直説法過去完了形(*haber* の線過去形+過去分詞)によって表すことが可能である。

- (23) c. Él Quería huir de ese lugar lo antes posible. Después de una jugada de tres lanzamientos, se tiró a propósito. Había fingido haberse torcido el tobillo y rápidamente se retiró.

長谷川(2017)が説明しているように、過去完了形は「過去のある時点で「完了した動作・状態」を、その時点との関連において示す。つまり、過去からみた過去なので「大過去」などとも呼ばれる」。

以上、考察したように、スペイン語の *fue que/era que* には、日本語の「のだった」のような、時制の一種（反省時）としての過去における現在または過去（大過去）を表す機能はない。これは、スペイン語にそのような時制を表す「専用の」動詞活用形がすでにあるため、*fue que/era que* の助けを借りる必要がないからだとも言えるだろう。

3.2. 独自の用法

次に、「のだ」とは異なる独自の用法（B1～B3）をもつ「のだった」における *fue que/era que* との対応を見ていこう。

3.2.1. 「想起」

- (25) a. そうだ、あすは太郎が来るんだった。 (野田 1997 より)

b. ¡Cierto! **Fue que/*Era que* Mañana vendrá / vendría Tarou.

- (26) a. 鏡に映った後部座席の少年が、ゲームボーイを持っているのが見えた。あれなら、3時間もあつという間かもしれない。今度はあれを買って来よう。

そう考えたたん、美鈴は息を止めた。…… “今度” はもうないんだった。

(野田 1997 より)

b. (略) **Fue que/*Era que* ya no habrá / habría una “próxima vez”.

(25)と(26)の a において、「のだった」は、話し手が「あすは太郎が来る」こと、「“今度”はもうない」ことを知っていたが、忘れていたという「想起」の意味機能をもつ。ここでは、「明日来る」のように、“未来”の出来事を思い出しているので、スペイン語では、(25)b や (26)b のように、*que* 節の動詞が直説法未来形 (vendrá / habrá) や過去未来形 (vendría / habría) になると考えられる。先述したようにその活用形は *fue que/era que* と共起できない。上のスペイン語の文が不適切なのは、それが原因であり、当該の意味機能の有無とは関係ないと考えられるかもしれない。では、*fue que/era que* には想起の意味があるのだろうか。やはり、*fue que/era que* は「想起」の意味を表さないと考えられる。まず、(25)や(26)で *es que* を使っても、文脈のない何らかの理由・原因の説明のニュアンスが出るため文が不自然になってし

まうため、*es que* が連動的に過去形になった *fue que/era que* でも同じだと考えられる。さらに、「のだった」は、現在や未来の事柄の想起だけでなく、過去の事柄の想起を表現することもある。過去の想起を表す(27)aの「のだった」を *fue que/era que* で訳そうとすると、(27)bになるだろう。ここでは、*que* 節内の動詞が形式的には共起できる点過去形や過去完了形になっているにもかかわらず、(27)bは不自然である。つまり、*fue que/era que* は「想起」の意味を表すことはできないと言ってよいだろう。

(27) a. そうだ、昨日は太郎が来たんだった。

b. ¡Cierto! #*Fue que*/#*Era que* ayer vino / había venido Tarou.

では、この「想起」の用法を表すスペイン語の表現はあるだろうか。実は、直説法線過去によって「想起」を言い表すことができる。

(25) c. ¡Cierto! Mañana venía Tarou.

(26) c. Mizusu vio que el chico del asiento trasero que se reflejaba en el espejo, tenía un Game boy.

Con ello, 3 horas podrían ser un abrir y cerrar de ojos. La próxima vez lo voy a comprar.”

Apenas lo pensó, Mizusu contuvo su respiración. “Ya no había una “próxima vez””.

線過去形は、「過去のある時点における状態や継続中の事柄を表現する」(長谷川 2017)。そこから、「のだった」と同じように、過去の記憶の中に存在していたという状態性を作るため、「過去に一旦認識していたことを忘れていて思い出した」という意味が生じると考えられる。また、過去の事柄の想起をスペイン語で表現する場合は、日本語でも「のだった」の前がタ形になるように、スペイン語では直説法過去完了形を使う。

(27) c. ¡Cierto! Ayer había venido Tarou.

「そうだ、昨日は太郎が来たんだった。」

長谷川(2017)が述べているように、直説法過去完了は過去のある時点で「完了した動作・状態」を、(28)aのようにその時点との関連において示すだけでなく、(28)bのように過去のある時点までの継続も示す。例(28)は長谷川(2017)より引用。

(28) a. Ya todos habían cenado cuando llegué a casa.

「私が帰宅したとき、みんなはすでに夕食を終えていた。」

b. Había llovido tres días hasta que por fin mejoró el tiempo.

「結局天気がよくなるまで、雨が3日間降り続いていた。」

スペイン語の過去完了形も事柄の状態性を示すため、線過去形と同じように「想起」の意味を表せると考えられる。なお、過去完了で使われる助動詞 *haber* の形態は線過去形である。

「想起」の「のだった」は、疑問文でも用いることができる。この場合は、疑問文として確認の意味が付け加わる。この場合も、スペイン語では、*fue que/era que*（や *es que*）がこの機能を担うことはできないが、直説法線過去形や過去完了形によって「想起の確認」を表すことができる。

(29) a. 今日は誰か来るんでした？

（安田 2014 より）

b. ¿**Fue que*/**Era que*/**Es que* vendrá/ vendría alguien hoy?

c. ¿*Venía* alguien hoy?

(30) a. 昨日、太郎が来たんだったっけ？

b. ¿#*Fue que* ayer vino Tarou?

c. ¿Ayer había venido Tarou?

(29)a と(30)a において、「のだった」は過去に話し手が認識していた事柄（今日は会議がある、昨日太郎が来た）を改めて問う発話として用いられる（安田 2014）が、既に述べてきたように、*fue que/era que* は時制に一致した事情説明の *es que* であり、疑問文にすると事情説明の要求の意味になるため、(29)b と(30)b が示すように、「想起の確認」を表すことができない。その代わりに用いられるのが (29)c の直説法線過去と(30)c の直説法過去完了形である。想起の確認は、未来の出来事の場合は線過去を過去の出来事の場合は過去完了を疑問文で用いることで表現される。

以上のように、スペイン語の *fue que/era que* は、「のだった」と異なり、「想起」や疑問文で「想起の確認」として「過去に話し手が認識していた事柄を改めて問う発話」の用法を持たないが、直説法線過去形ないし過去完了形によってその機能を表すことができる。

3.2.2. 「後悔」

(31) a. あの時そう言うておくんだった。

（田野村 2002 より）

b. #*Era que* decía/había dicho eso en aquel momento.

- (32) a. もっと勇気を出して、祈るんだった。(三上 1953 より)
b. #*Era que* oraba/había orado sacando más valor.

(31)a と(32)a の「のだった」では、話し手が過去にすべきだった行為をしなかったことを「後悔」していることを示している。しかし、その意味は、*fue que/era que* によっては表せない。やはり、事情説明の意味になってしまい、後悔のニュアンスが出ない。

この場合、スペイン語では、義務を表す表現である *tener que*(+不定詞)の直説法線過去形(以下の例の c.) または点過去形(以下の例の d.) を用いることで、「後悔」のニュアンスを伝えることができる。

- (31) c. Tenía que haber dicho eso en aquel momento.
d. Tuve que haber dicho eso en aquel momento

- (32) c. Tenía que haber orado sacando más valor.
d. Tuve que haber orado sacando más valor.

スペイン語の直説法線過去は、「事柄を完結したものとして表さない」ため「過去のある時点での未遂の事柄(起ころうとしていた、しようとしていた)」(長谷川 2017)を示すこともできる。従って、*tener que* の直説法線過去形は、過去のある時点で何かをする義務があった状況を示し、その義務が未遂に終わった、すなわち、事柄を遂行しなかったことを示唆するため、「のだった」の「後悔」に近いニュアンスを伴うことがある。田野村(2002)も「のだった」について、「今になって思い至った過去の当為を述べるものであり、現実的にはそのことを行わなかったことに対する後悔の念が含意される」と述べており、スペイン語の *tener que* の場合もこれと同じである。直説法点過去の *tener que* も同様であるが、点過去形は、「過去の事柄を終わったこと、完結したこととして表す」(長谷川 2017) ため、事柄を遂行する前の義務の段階で状況が完結したことを表すため、事柄の未遂が線過去形の場合よりも明確になり、「後悔」のニュアンスがより強調される。

以上のように、スペイン語の *fue que/era que* は、「のだった」と異なり、「後悔」の意味合いを表さない。そのニュアンスは、*tener que* の直説法線過去形または点過去形によって伝えることが可能である。

3.2.3. 物語を締めくくる

- (33) a. その少年は5年後に大統領になるのだった。
b. #*Fue que*/#*Era que* se convirtió/convertía en presidente 5 años después.

- (34) a. 平和の訪れと王子との再会の喜びを胸に、小人たちに別れを告げた白雪姫は王子と共に旅立ち、王子の国で末永く、幸せに暮らすのだった。

([https://ja.wikipedia.org/wiki/白雪姫\(1937年の映画\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/白雪姫(1937年の映画)) より)

- b. (略) #*fue que/era que* vivieron/vivían eternamente felices en el reino del príncipe.

(33)a では、何らかの経緯を経て物語の未来でその少年が大統領になること、そして、(34)a では、物語の終盤以降、白雪姫と王子が末永く幸せに暮らすことを表している。このような物語を締めくくる場面で用いられる「のだった」の用法を *fue que/era que* で表すことができない。(33)b と(34)b において、*fue que/era que* は既に述べられたことに対する事情説明を表すため、不自然になってしまう。

上の締めくくりの場面で伝えようとしているのは、物語の終わりの過去の時点から見て“未来“に起こる出来事の描写である。スペイン語は、このような状況をまさに表す時制形を有している。それは直説法過去未来である。この時制は「過去からみた未来の事柄（＝未来の過去形）を表す」（長谷川 2017）。

- (35) Su novia le prometió que no volvería a ver a Carlos. (長谷川 2017 より)

「彼の恋人は再びカルロスに会うことはないと彼に約束した。」

上の例においては、「約束した」という過去の時点のその後の“未来“における事柄である「会う（ことがない）」が過去未来形によって表されている。

そうすると、(33)a と(34)a の「のだった」は、*fue que/era que* を用いずに、スペイン語の直説法過去未来形によって表すことができる。

- (33) c. Ese joven se convertiría en presidente 5 años después.

- (34) c. Blanca nieves, quien se despidió de los enanitos teniendo en su corazón la alegría por el reencuentro con el príncipe y la llegada de la paz, partió en un viaje junto al príncipe y vivirían eternamente felices en el reino del príncipe.

以上のように、スペイン語の *fue que/era que* は、物語の締めくくりでその後に起こる出来事を表す「のだった」の意味合いを表さない。その意味は、スペイン語では直説法過去未来形によって表現する。

3.3. まとめ

2.2 節で示した「のだった」の意味機能がスペイン語の *fue que/era que* とどのように対応

するか、また、対応しない場合、スペイン語では当該の意味をどのように言い表すかについて考察した。本稿で明らかになったことをまとめると、表1ようになる。

表1

日本語	スペイン語	
「のだった」	<i>fue que/era que</i>	他の表現手段
A 命題の過去性を表す		
A1. 事情説明・関係付け	○	—
A2. 過去における現在または過去 （大過去）」	×	○（直説法線過去）
B.独自の用法		
B1. 想起	×	○（直説法線過去／過去完了）
B2. 後悔	×	○（ <i>tener que</i> の直説法線過去／ 点過去）
B3. 物語を締めくくる	×	○（直説法過去未来）

（注：○は対応することを、×は対応しないことを示す）

結論として、「のだった」と比べて、*fue que/era que* はその意味機能がかなり限定されていると言える。具体的には、*es que* から「継承」した事情説明・関連付けの意味機能しか表さない。これは、*fue que/era que* が *que* 節の動詞の時制に連動して *es que* が点過去や線過去になったにすぎないからだと考えられる。ある種の「時制の一致」と言えるだろう。また、*que* 節内の動詞が点過去形の場合に *fue que* が、そして当該の動詞が線過去形ないし過去完了形の場合に *era que* にすることができるという点でも「一致」している。この二つのスペイン語の表現の間に意味機能の差はない。日本語の「のだった」との対照を通じて明らかになったもう一つの点は、事情説明・関連付け以外の「のだった」の意味機能がスペイン語では動詞の活用形で言い表されることである。とくに、直説法線過去や過去完了が「想起」の意味を表すことは、スペイン語文法においてあまり記述されていないと思われる。従来、あまり研究されてこなかった *fue que/era que* 自体の考察とともに、本稿はスペイン語文法にとっても新たな貢献となった。

4. 終わりに

本稿では、スペイン語の *fue que/era que* の意味機能がかなり限定されていること、そして、両者が持たない「のだった」の意味機能はスペイン語の動詞活用形により表現できることを明らかにした。後者の対応について、逆にスペイン語から日本語を見返してみると、なぜ日

本語では単純なタ形ではなく、「のだった」を使うのかという疑問が沸く。スペイン語は、テンス・アスペクト・ムードを内包する動詞活用形式を豊富に持っている。一方、現代日本語の動詞の「活用形」は、ル形（する）やタ形（した）ぐらいしかなく、“貧弱”である。それ以外のテンスやアスペクトやムードは、補助動詞やモダリティなどによって迂言的に表現する必要がある。三上(1953)は、「のだ」と「のだった」を時制の一種と捉え、その時制というのは「テンスばかりでなく、ムード的なもの、アスペクト的なものにわたっている」と述べている。野田(1997)も「のだ」と「のだった」はムードとして機能すると論じている。スペイン語では活用形のみで表現できる意味機能を日本語では「のだった」などによって迂言的に補っていると言えるのではないだろうか。現段階でこの考えは推測の域を越えないが、今後、さらに考察を深めていきたい。

参考文献

- 田中章夫(1971)「「なのだ」「なのです」「のだ」「のです」, 松村明編『日本文法大辞典』, p.559, pp.655-656, pp.660-661, 明治書院
- 田野村忠温(2002)『現代日本語の文法Ⅰ:「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 寺村秀夫(1971)「‘タ’の意味と機能」『岩倉具実教授退職記念論文集 言語学と日本語問題』くろしお出版
- 野田春美(1997)『「のだ」の機能』くろしお出版
- 長谷川信弥(2017)『大阪大学外国語学部世界の言語シリーズ 7 スペイン語 [改訂版]』大阪大学出版会
- 福嶋教隆(1994)「「のだ」と es que」『国立国語研究所報告 108 日本語とスペイン語(1)』, pp. 57-79, くろしお出版
- マジョール, ロドリゲス・ホルヘ・ダニエル(2021)「日本語の「のだ」とスペイン語の es que 及びその類似表現の対照研究— es que, y es que, y, pues, acaso—を中心に」『間谷論集』第十六号, pp.83-104, 日本語日本文化教育研究会
- 三上章(1953)『現代語法序説—シンタクスの試み—』刀江書院
- 三上章(1963)『日本語の構文』くろしお出版
- 安田崇裕(2014)「ノダ系の諸表現の包括的記述」, 『北海道大学大学院文学研究科研究論集』14, pp.103-123, 北海道大学文学研究科
- 和佐敦子(2005)『スペイン語と日本語のモダリティ 叙法とモダリティの接点』くろしお出版